読書感想文コンクール課題図書リスト

～ 名女大生に贈る名著 12 stories ～

書影	書　名	著者名	著者名	頁数
		請求記号		
	置かれた場所で咲きなさい	渡辺和子 著	幻冬舎	159ｐ
		S1/14273		
	置かれたところこそが、今のあなたの居場所なのです。時間の使い方は、そのままいのちの使い方です。自らが咲く努力を忘れてはなりません。雨の日、風の日、どうしても咲けないときは根を下へ下へと伸ばしましょう。次に咲く花がより大きく、美しいものとなるように。			
	教えるということ	大村はま 著	共文社	158ｐ
		S3/12576		
	50年に及んで一教師として教育実践の場に立ち、退職後も新しいテーマを研究・発表しつづけている著者が、本当に“教える”ということはどういうことなのか、具体的な数々のエピソードを通して語った。プロの教師としてあるべき姿、教育に取り組む姿勢について、きびしくかつ暖かく語る。教育にかかわる人をはじめ、教育に関心をもつすべての人々、とくにこれからの社会を担う若い人々に贈る一冊。			
	推し、燃ゆ	宇佐見りん著	河出書房新社	125p
		913.6/753		
	推しが炎上した。ままならない人生を引きずり、祈るように推しを推す。そんなある日、推しがファンを殴った。第164回芥川龍之介賞受賞。			
	君たちはどう生きるか	吉野源三郎 著	岩波書店	339p
		159/134		
	著者がコペル君の精神的成長に託して語り伝えようとしたものは何か。それは、人生いかに生くべきかと問うとき、常にその問いが社会科学的認識とは何かという問題と切り離すことなく問われねばならぬ、というメッセージであった。著者の没後追悼の意をこめて書かれた「『君たちはどう生きるか』をめぐる回想」(丸山真男)を付載。			
	こころ　改版	夏目漱石 著	新潮社	378ｐ
		S9/12563		
	親友を裏切って恋人を得たが、親友が自殺したために罪悪感に苦しみ、自らも死を選ぶ孤独な明治の知識人の内面を描いた作品。鎌倉の海岸で出会った“先生”という主人公の不思議な魅力にとりつかれた学生の眼から間接的に主人公が描かれる前半と、後半の主人公の告白体との対照が効果的で、“我執”の主題を抑制された透明な文体で展開した後期三部作の終局をなす秀作である。			
	こんな夜更けにバナナかよ ： 筋ジス・鹿野靖明とボランティアたち	渡辺一史 著	文藝春秋	558ｐ
		S9/18992		
	ボランティアの現場、そこは「戦場」だった―筋ジストロフィーの鹿野靖明さんと、彼を支える学生や主婦らボランティアの日常を描いた本作には、現代の若者の悩みと介護・福祉をめぐる今日的問題のすべてが凝縮されている。講談社ノンフィクション賞、大宅壮一ノンフィクション賞をダブル受賞した名著。			
	思考の整理学	外山滋比古 著	筑摩書房	223ｐ
		S1/10006		
	アイディアが軽やかに離陸し、思考がのびのびと大空を駆けるには？自らの体験に則し、独自の思考のエッセンスを明快に開陳する、恰好の入門書。			

	スマホ脳	アンデシュ・ハンセン著 久山葉子 訳	新潮社	204ｐ
		S4/21338		
	コロナ禍で自宅時間が増え、大人も子供もスマホやパソコン、ゲームやＳＮＳに費やす時間が増えていませんか？欧米では運動不足や睡眠不足、うつになる児童や若者の増加が問題になっています。記憶力や集中力の低下、成績悪化、心の病まで引き起こす、そんな毎日を一変させる方法をベストセラー『スマホ脳』のハンセン先生が教えます。教育大国スウェーデンの教育現場を変えた、簡単なのに科学的な方法とは！？			
	センス・オブ・ワンダー	ﾚｲﾁｪﾙ・ｶｰｿﾝ 著 上遠恵子 訳	新潮社	60ｐ
		S4/12554		
	子どもたちへの一番大切な贈りもの。美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目を見はる感性「センス・オブ・ワンダー」を育むために、子どもと一緒に自然を探検し、発見の喜びに胸をときめかせる。			
	夏の庭	湯本香樹実 著	新潮社	218ｐ
		S9/3863		
	町外れに暮らすひとりの老人をぼくらは「観察」し始めた。生ける屍のような老人が死ぬ瞬間をこの目で見るために。夏休みを迎え、ぼくらの好奇心は日ごと高まるけれど、不思議と老人は元気になっていくようだ―。いつしか少年たちの「観察」は、老人との深い交流へと姿を変え始めていたのだが…。喪われ逝くものと、決して失われぬものとに触れた少年たちを描く清新な物語。			
	星の王子さま	サン=テグジュペリ 著 管啓次郎 訳	角川書店	158p
		S9/6870		
	砂漠に不時着した主人公と、彼方の惑星から来た「ちび王子」の物語。人の心をとらえて離さないこの名作は、子供に向けたお伽のように語られてきた。けれど本来サン=テグジュペリの語り口は淡々と、潔い。原文の心を伝えるべく、新たに訳された王子の言葉は、孤独に育った少年そのもの。ちょっと生意気で、それゆえに際立つ純真さが強く深く胸を打つ-。「大切なことって目にはみえない」。感動を、言葉通り、新たにする。			
	夜と霧	V・E.フランクル著 池田香代子訳	みすず書房	169ｐ
		946/5		
	心理学者、強制収容所を体験する―飾りのないこの原題から、永遠のロングセラーは生まれた。“人間とは何か”を描いた静かな書を、新訳・新編集でおくる。			